

# 「同朋の会」(真宗大谷派)運動の精神と展望

— 訓覇信雄総長を訪ねて —

茂田井 教 亨

望 月 一 靖

丸 山 照 雄

ま え が き

現宗研調査部では、過去三年余にわたって真宗大谷派「同朋の会」運動について研究してきたが、常にわれわれのぶしつけな希望を容れていたが、懇切な指導と協力を得ることができた。今回は真宗大谷派近代教学の創始者であり、「同朋の会」運動の理念的指導者である曾我量深師を茂田井所長に訪ねていただくとともに、訓覇総長及び宗務役職員の方々に對して謝意を表していた

だき、今後の一層の御協力をお願いした。

ここに採録した記録は茂田井所長、望月前調査部主任と俱に、訓覇総長を大谷派宗務所に訪ねた折のものである。

「同朋の会」運動の代表者であり指導者である訓覇信雄師に、真宗の改革と信仰運動に身を挺して来られた精神史などを語っていただいた。伝統仏教々団において、教団改革のもっとも尖鋭な問題提起者である師の言葉は、大谷派の伝統と新生にのみかかわっているのではなく、伝統仏教の現状と未来に對する現實的警告

を含むものである。しかも批評家の空言ではなく、大谷派一万余寺を卒いて「同朋の会」運動を指導し実践してきた裏づけは、言外にその重みを思わせるであろう。野人・訓覇師の人柄を伝える意味で、言葉はなるべく語られたままを生かすよう努めた。貴族的教団の体質へ、全身の抵抗をこころみてきた批判精神を、そこに読みとっていただきたい。(丸山記)

【丸山】 今、曾我先生のお宅へお伺いしましてお話をうかがってまいりました。

【訓覇】 ああそうですか。それはけっこうでした。

【望月】 色紙まで書いていただいて、頂戴してまいりました。

【訓覇】 夕べおっさん、二時間ばかりみえておられて、会館(高倉)で報恩講を(講演)やっておられたから……(疲れておられたでしょう)

【望月】 昨晚(私ども)高倉会館へ伺がわさせていただきました。

【訓覇】 ああそうですか。山田先生(山田宗睦)の話だけ僕は聞いて……帰りました。

【望月】 しかし(曾我先生は)お元気でいらっしやいますねえ……

【訓覇】 ちょっと……バケモノですねえ……(笑)

【茂田井】 いくら精力的だといっても……とても私などおよばないです……驚きました。

【訓覇】 いつか丸山さんにお話したが、三十代の中ば頃に「日蓮教学の研究」という論文を書かれた。とうとう出版はできなかつたんですが……

【望月】 ああそうなのでございますか……

【訓覇】 始めの……法蔵菩薩というような発想はやはり上行菩薩からきとるんではないかと僕は想うんですが……

【茂田井】 ははあ……

【訓覇】 地涌の菩薩ねえ……

【茂田井】 地涌の菩薩……

【訓覇】 だからはじめ日蓮教学をずいぶんやったんですね……  
やっぱりそういう恰好してるわねえ……あれ……(笑)

【茂田井】 もう必ず華嚴の善財童子の……まあ歴史というか、それから法華經の地涌の出現……

それから法蔵比丘といったようなことを必ず並べてお話になるからねえ……やっぱり関心がおありになったわけなんです。

【訓覇】 「地上の救主」一番はじめの論集がそうです。その次が「救済と自証」ですが。初期の、三十前後ですね

あれはやっぱり自涌のことですね。

【茂田井】 自涌のこと書いておられますねえ。

【丸山】 今日お伺いいたしましたのは訓覇先生の個人的なことまでおうかがいしたいと思ひまして……いろいろな質問いたしますが……(笑)

【訓覇】 いやあ、あまりプライバシーのことは……

【丸山】 朝日新聞(「人生を語る」)のインタビューにお答えになられたなかに、高光大船師というお名前がでておったんですが、私ども高光先生という方がどういふ方か知りませんのでお話願いたいのですが……

【訓覇】 そうですねえ、あの方は一生教団の表面にはでて来なかつたんですね。暁鳥さんの弟分みたいな立場だったんです。

生涯貧乏しながら、妥協せずに、金沢の封建的な門徒並びに住職と一生戦つて死んでいった人です。

清沢先生よりちょっと年うえですか。東京の巢鴨に大谷大学があつた頃の学者ですわ。これはまあ生きるとして八十四、五歳になりますか。……ちょっと変わった人としてねえ、みんな僕らの仲間はひと通り曾我さん、安田さんにゆく前に高光さんに逢うて、一応まあひとつの慧心というか

そういう体験を、いやでも応でもさせられにやあらん——(そういう)人としてねえ……

しかしそのあとで、やっぱりそういう体験の内容にひとつの客観性をもたせるといふことになる、また曾我さんや安田さんの教学なりを聞かなくてはならんといふことになつてくる、という人と、それと逆に曾我さんの講義ばかり聞いておつても、さあ理論としてはわかるけれどもどう自分の実際の身につくものかといふことになると、また高光さんに会つて(体験するわけです)。

鉄鎚を下しますからねえ。僕らメヒストヘレスといつたんですけれども、そういう人でしたわ。容赦しないんだから。いいかげんなことをせん人でしたわ。徹底的に、もう最後のところまでたたきこわしてしまふ人でしたがね。まあほんとうに美しい人ですけれども(早く亡くなりました)。暁鳥さんの弟分でした。

(註) この対談の間で△鉄鎚……▽といふくんだりを語る時、訓覇総長はもっとも大きな声をはりあげ、熱情的な言葉づかいであつた。後半の教育の問題のときにてくる△仏者▽を育てるといふことの場合でも、高光大船師が、ひとつのイメージとしてあり、そこに典型を見出しているのだと思われる。

【丸山】 その方はやはり清沢先生の……

【訓覇】 そうです。清沢先生の教えを受けた人でした。

野人で、一生を（おくられた）……まあ、ああいうのを  
仏者っていうんでしょねえ。生活と信仰とが一つになっ  
ていて——田舎でうずもれた人、亡くなった人です。——今  
日全国で——何らかの形で、自分の地方で信仰運動をやっ  
てる人は、一応やっぱり高光さんになんらかの形で逢うた人  
が多いですね。（体験的に）はつきりさせますから。

【丸山】 曾我先生からもあまりお伺いできなかつたんで  
すが、曾我先生にとって大変困難な時期——先生も「大学  
から追われた」とおっしゃっておられたんですが、

【訓覇】 昭和五年です。私らが卒業した年でした。

【丸山】 ——その頃、大学を追われてから、教団でどん  
な風な御活躍をなさったんでしょうか——曾我先生は——

【訓覇】 曾我先生の二年先ですか、昭和三年に上村さん  
が追放されていますからねえ。だから上村先生と二人で師  
子ヶ台に光芒学園っていう学園を、当時の篤信の信者で財  
力のある人が応援しましてつくったんです。講義と教化と  
両方やるような機関をもって、そこでやっぱり講義をしと  
ったんです。そのとき行っとったのが日本大学の松原なん  
かですね。それから大学を追放になってから始めて地方へ  
——地方へ行ったのが始めてじやあないですけど本当に民  
衆に直結して講演にまわられたのは、昭和五年以後です

ね。その最初の講演が、金沢でやった「本願の内観」って  
いう著書ですね。あれは、そういう意味で劃期的なものだ  
す。

【丸山】 その頃、総長さんも一緒に……

【訓覇】 私は東京へ行ってきました。ストライキばかり  
やって、金子さん曾我さん擁護で、ここ（本山・東本願寺  
のこと）とけんかしていたものですから京都にいたんでは  
これはう、だつ、があがらんということで、それで大東出版に  
おりました。

——そのかわり両先生で光芒学園の講義をし、また地方  
へ、そういうものを求めておる人々の処へ講演にまわって  
おられたんです。

【丸山】 あの、伝え聞くところによりますと、曾我先生  
を擁護して総長さんは学生時代に、大変はでにストライキ  
をおやりになったとかということ（笑）を聞いております  
が事実はどうなんでしょうか。

【訓覇】 たいしてはでにっちゅうことはないけども……  
（笑）

その時分にちょうど曾我さんのときはですね、今話たよ  
うに、私らが昭和五年の三月の十六日か七日頃卒業の式が  
ありましてですね、当時のここの教学担当の参務——その

時教學部長と云つてた下津川っていうのが——私が学校におる間に切るとストライキをやるというので、たしか三月十六日か七日、僕ら卒業式の晩に曾我さん呼んで切ったんです。

私ら知らんもんだから、卒業して曾我さんの今の家へ行った。そしたらいやに妙な顔してるじゃあないですか——ゆうべやられたちゆうことだ——卒業した後だもんだからどうにもならん……

【茂田井】 はあはあ……なるほど。

【訓覇】 それで、今は引退していますが、当時少し有名だった、岩倉政治っていう作家——

【丸山】 はあ存じております——

【訓覇】 岩倉君が僕らより二年下でして、岩倉君に、僕ら卒業しちまったんでしょうがない。君ら四月早々ストライキやれと、云うて僕ら帰つたんです。

僕らがやったときは小使いと配属将校だけ残って他は全部、総辞職するっていうところまでいったんですね——あれ。

あれは面白かったですな——今はだめですが——(笑)

【丸山】 そのかんじんな問題点というのはどういうことなんです。曾我先生がいけないということの——

【訓覇】 まあ、異安心というんですけどねえ、その前の金子さんのときの問題が浄土の問題でしてねえ——「浄土の観念」という著書をもとにして——云いだしたのは総代連中ですね。ここの予算に非常に(発言権をもっていた)

会社の社長で、本山の経営予算が足らんようになるのとそれくらいは出しよつた——そこらへんの古い門徒の代表とですね。それから死んでから浄土があるんじゃないちゆうようなこと、そういうことについては古い学者が問題にした。例えば、斎藤(ゆうしん)、ああゆう人が、もうひとつ年代が先の先輩として、大谷大学におりまして——そこらとまあいっしょになりましたやつたんですね。

佐々木(げっしょう)さん、曾我さんと同じくらいですけど、佐々木さんが学長になる時に非常にまあ問題があつて、非常に苦心して佐々木さんは学長をやつたわけですよ。先輩をさしおいて四十七・八で学長になつたんですねえ。そういうふうなのが燻つたのが、その時分に浄土の問題を契機としてですね(起つたんです)。発端は「浄土の観念」という著書です。これは講演の速記ですけども、つまり浄土は死んでから死後の問題じゃあないと、実体論的な浄土論とちがうということを、まあいつたわけですね。それがもとですねえ。その金子のまあ兄貴分で、

金子を指導しとるんのが曾我だということですね。曾我・金子ということで追放したんです。あのときは大学もだいぶ抵抗したんですけどね。

【丸山】 そういう事件を経過しながらやはり数学というものは変ったんでしょうか。今は曾我先生は宗学を中心ですが、その前の数学と、曾我先生がもう一度教団に容れられるという形で相当な変化があったとみてよろしいんでしょうか。

【訓覇】 二人がやられて、ストライキがあつてからは先生が辞めましたからねえ。仲間の教授は。で、古い先生をもつてきてやつたんですけれども、うまくいかずに、その間に古い先生はまあ死んでしまったということもあるのだから、それからまあやっぱり社会がどんどん動いていった、ということもいっしょになつて——昭和十八年に私が学校にあらがったんですが——十六年にでしたか、また帰つて来られたわけです。二人とも。関根学長のときに——これは清沢先生が学長のときに巢鴨で主管をやつとつた関根さんですね。関根さんを学生が排斥したもんだから清沢さんはやめたんだが、その関根さんがまた、昭和十六年から学長になつて、また曾我さんを入れたんですよ。それからまあまたもどつたんです。そのままずうつときているわけです。

それと同時に、今お話したように実体的な、死後の浄土なんていつているそういう老教授はみんな亡くなったということですね。そういう跡を継ぐ学者はもうたいしてでてこなかった。ということ、今のようになつていまま。まだ田舎のじいさん・ばあさんの中にはそういうのが若干おられますけれども——

【丸山】 清沢先生のご著述の場合は哲学的な色彩が強いと思うんですが、曾我先生の場合はやはり宗学的なもの強いと思うんです。宗学という問題で考える場合には、やはり曾我先生が近代宗学のひとつの転機になつていふんでしょうか。

【訓覇】 そう……そうですね。そうなるかもしれませんが、すな。

【丸山】 あの話がとんでしましますが、最近の「同朋の会」の運動の中で釈尊伝に大変力を入れておられるようですが——

【訓覇】 カリキュラムの問題ですね……

【丸山】 今日曾我先生からうかがつてこなかったんですが、そういうことは今の宗学上の問題として何か重要な、重点的に考えなければならぬ問題になつていふんでしょうか。

【訓覇】 いやそういうわけでもないんですけどね。一応カリキュラムが必要でこれをつくろうということから、そうなればまあ教主釈尊からはじまらんんじゃないかということ、草稿は教化研究所でつくりまして、曾我先生に見てもらってまあよからう、ということをやつとるんですけどね。やっぱり教主は釈尊であると、そこからはじめて系統的にひとつ（やっつていこうと）聞法の会といましてもみんながもう勝手なことを云つとつてもだめだからそこで一応カリキュラムを組むと——それなら釈尊からはじめようと——これがもてこうなつてきたわけです。

【丸山】 ——御自坊にお帰りになって、しばらく御自坊のことをなさつておられた時期には、この何か特殊なことをなさつていらつしたんでしょうか。

【訓覇】 ああこれは、高光さんに来てもらつて、いねむり半分、何を信ずるんかという顔でお説教を聞いてつたもんだから、土地の若いもんを啓発してやつとつたつちゅうわけです。

【丸山】 やはりそういう御経験は今度の「同朋の会」運動に役だつておられますか——

【訓覇】 それはやっぱり非常に役にたちますな。

【丸山】 それから「無尽灯」というのは清沢先生がはじ

められたんですか。

【訓覇】 「無尽灯」は——歌仲間機関誌のようなものだったんですが——

【丸山】 それはいつ頃まで「無尽灯」という名前で出ていたんでしょうか。

【訓覇】 いつ頃でしたかな、今ちょっと覚えておりませんが——

【丸山】 それから「真人社」ですか、あの運動を展開していくそれとの関係は——

【訓覇】 それはまあ思想的なつながりはありますけれど

「真人」は昭和二十二年でしたか、これはやっぱり清沢さんからの流れの上に立つてですけれども、直接的な契機になつたのは、敗戦になつてですね、民族が減じる危機だと、そういう虚脱からたちあがるものやはり仏教しかない、と、「真宗仏教人」と、いうのを略して「真人」としたんですな。そういう終戦時の虚脱というものを、そこから立ちあがるのはどうしても仏教しかない、そういうことで真人といつたわけです。

【丸山】 これは単なる信仰運動ばかりでなくて、教団の体質改善といえますか——（そういうことも課題として考

えられていたのでしょうか。)

【訓覇】 いやあこれはあとでございましてねえ、まあ多少教団に属しておりますから、それを無視したわけでもなんでもありませんけども、まあこういう教団とわしらとは違うと、まあ相手にせずに——(笑)

こんなもん相手にしといたらいつまでたっても駄目であるということもあって、やったんですけれども、やっていた僕らの仲間が宗議會議員にみんなしてしまつたもんですからねえ。別にならうと思つて誰もしたんじゃあないんですけど。そうすれば、議會へ来れば議會人としての教団の革新ということをしなければならんということになつていく。それでまあこれは道を間違つてこんなことになつてしまつたんですけど——

本来はまあこういう教団のなかで何んかしようなんていうことは誰も思つていませんでしたね。こんなのはもう滅びてゆくんだと、こりゃあ——徳川の封建制にサービスしてすね、それはそれだけの二応の功績があるんだから、これはまあ救滅の表彰状でもやつて(笑)——なんていうくらいのことを考えとつたんです。

妙なことに議員にしようたものですから(笑)だからついでにお前が出るんなら俺もでようか、なんてことになつてし

まつて——それで私は仲間の議員の連中にも、体制内——現体制内執行は絶対あかんといつておつたんです。(笑)

【丸山】 真人社の場合どのくらいの同人といひますか、同行の方がお集りだつたんですか。

【訓覇】 ええ、発行部数は約二千でしたがね——千五百から二千でしたが、あの時分はみんな教団のなかでしばられていませんからねえ、みんな自由に(やれました)——この間二十周年になるもんですからいっぺん何んちゅううことなしにやろうか、ということと、当時の昭和二十二年、三年頃の「真人」の記事を読んできると、みんな随分よくやつてますわ地方で。それぞれやっぱり本気でやろうというものが(あります)今、僕らがこの中に入ったもんだから、みんなもう本山にまかしときつ——ちゅうようなものになつて一口だけあけててねえ、これはあかんのですよ(笑)

【丸山】 坊さんが中心のものだったんですか。

【訓覇】 いや、在家の人といつしよです。それと宗派を考えていませんから。それですから東寺の人、真言の人、真宗でいえば高田の人、そんなことは全然無差別でやつたですねえ——あの時分は。あの方がいいですなあ。こんな室の中に入つてはできませんわ。

ことにあなた方よくお調べのように、最後の貴族がおる



んだからあ……(笑)

歴史の皮肉——僕はあれをね、おれは総長演説でいうた。あの最後の貴族が……庶民の中に骨をうづめた親鸞の末孫が最後の貴族になつるのは歴史の皮肉である——あれを総長演説でやつたというたら、みんなそれだけはやめとけといひよる。(笑)

あれはありがたかったです。

【丸山】 「同朋の会」の問題に入っていくわけですが、教化研究所ですか、今お話にありましたカリキュラムの編成など、いろいろやっておられますが、そのなかで、いわゆる住職の再教育の問題ですね、これはどんな風なビジョンといいますかお考えでいらっしやいますか。私どももするべきだといふものの、実際にはなかなかできるものじゃあないんです。実際に再教育できるものかどうなのかお考えをうかがいたいんですが。

【訓覇】 これはねえ、一部からそういう声があります。

このあいだ宗門の実態調査をやってみまして、約七割何分か回収されておるんですが、(その中でも)そういう声はそうとうできております。けれどこれを義務づけてですね、これをするといふことは実際できまへんな。できんこととはないでしょうけど、してもどうでしょうか——

私どもとしては今この奉仕団——ほとんど一月から満員で来てますけど——今年は特に総代の奉仕団を中心にしてきてます。そういう総代及び門徒のなかで、信仰を得たいというそういう願いをもった人をまず教育すると。それによつてですね、住職というのはなかなか腰をあげんから特撰隊にして、門徒の人の中心になる人を教育して、門徒から住職の尻を叩かせるといふ一応方針できとるんです。これはまあだいぶこの空気が浸透しとるようなんです。

あそこらへんのタイミングを考えてですね、これはまあ腰を下してですね、葬式とお経を讀んただけではいかんといふ——一応のめどがですね(たつたところでやつたらいと思っています)

めどつていふのは一万ヶ寺のうち三千四・五百の住職がですね、——今は約二千五百くらいまでここへ来とるんですが——三千四・五百が来るようになればもういいんじゃないか(思っております)その時になりましたら、あらためてですね、育成員の再教育をですね、やはり義務づけてやつたらいいんじゃないか(思います)まあ(あと)四・五年じゃあないかと思つてますけれども。

【丸山】 総長さんは「同朋の会」運動といふのは非常に長い運動であると、長期にわたつてのものであるとこうお

っしゃっているんですが、それはどういう意味で言っておられるんでしょうか。

【訓覇】 いやあんたらの、その日蓮聖人みたいに勇ましいこといわんもんだからうちのは——(笑)

それで手間かかるだろうと思うのと、それからやはりまだ田舎へ行きますと、特にうちの地盤の北陸なんかでありますとすね、そうとうの寺がまだ封建的な人の動きが実際の力はなくても、形の上でまだ残ってるもんですからねえ。しかし、もう数年のうちに加速的にこれは、世代の交代と同時に変わっていくと思いますがね。そういったようないろいろなことでそう一挙にはいかないと——やろうと思えばやれないことはないんですけどね、かえって混乱と障害の方が多いんじゃないかと思って(この際ひかえとるわけです)

一応これもすねえ、ふみ切っている時期がきたら。今は少し問題を起さないように遠慮してやっとなるんだから、かまわずに思いきってやってしまいたいですね。もうそういう時期がくると思いますけど。

【丸山】 私ども石川県能登を少し見て歩いたんですが——

【訓覇】 ええ、あそこは特に——

【丸山】 大変なところだと思っんですけれど。

【訓覇】 しかしあそこもね。昨年ですか、一昨年の秋頃から変わってきましたね、能登が。といいますのは従来のいわゆる古い型のお説教をやったのが、「同朋の会」運動でだんだんこの繩ばりがせばまって、たのまんようなことがあったのと、まあいろいろと社会の変動もあってすね、転向したのがでてきたんですわ。古い形の連中が。説教者が。そんなことが非常に大きな力になって今能登の方は、去年おととしと、まあ約二年くらいの間に非常に変ってきましたね。

【丸山】 まあ私どもの教団でも同じことだと思っんですが、新しい何かが起った場合、一つは競争心からだと思っんですが。あっちはそうたいしたことはない、云うほどのことはないんだとか、実際はこっちの方がいいんだとか、恰好だけはむこうはよくやっているが、内容はこっちの方がいいんだとかですわね。妙な派閥的なものがすね——

【訓覇】 ——党派的なものがでてくるんですわね——それは必ずでてきますわ。必ずでてきますけどねえ、僕はその落伍者や、ちゅうとるんですがね。時代についていけないやっぱり信仰運動というのは教団の場合社会の転換に即してやっていかなければならんですから——数は少くてもですわね、何といえますかひとつの時代の威力ちゅうものが

あると思うんですね。数ではわからんものがある。

——私どもは一応一万のうち三割はこれは良識的にやらにゃあならんと思うとる。もう三割はこれはもうお寺は兼職するための宿屋みたいなものであると。一応無関心派といえますか、あとの真ん中の三割はこれはまあ日和見ですわね。これがまあ三割の三千ヶ寺がつかめればこっちへ来ると、こう見ているんですねえ。その時期ちゅうのは五・六年、四・五年ではないかとみているんですが——まあうまくいけば。その時期がひとつの転機ではないかと思えますけどね。だからその間に過去の第一次と第二次で十年になりますから、別に講師とかあらゆる指導者とか、養成して始めたわけじゃあないわけです。その間にだんだん投入した若い住職が指導者としてだんだん育っていくという時を待って、そういう時期がくるという一応の予定なんですけどね。

【丸山】 先程もお話にありましたが、その在野での運動とですね、こういう宗門の伝統的な体質を継承していく場合とですね、比較すると、たしかに継承していく方が大変なわけですけど、私どもは実際にそうした体験をもっておりませんので、伝統的な場での運動をやっておられる立場からの御意見をうかがいたいのですが——

【訓覇】 私はねえ、やっぱり最初の真人社のような立場でやった方がええと思ってるんですね。もう面倒でしょうがないですよ。

ぼくはむしろ在野で実績をあげると——何ていいますかそれはいい意味で圧力をここへかけられると、いうような方がいいんじゃないかと。僕は今でもそう思っていますわ。できたら早く逃げだしたいんだけども。

【丸山】 こんどは逆に、野に放つと困るという——(笑)

【茂田井】 虎を野に放つことになるからね——

【訓覇】 虎っていえばね曾我さんもねえ、昭和十二・三年でしたか。曾我さんを——うちの学者の一番高いところを講師というんですね、その講師に僕らは、まあ良からうとしてしたんですね。あれはせん方が良かったと思ってます。あれは虎を檻へ入れたようなもんでね。

やはり虎は野においてここえ吠えつかせた方が良かったですね。それと同じ気持ですな。その方がいいんじゃないですか。

【望月】 私も曾我先生とお話をしながらちょっとそれがわかるような気がしますね。

【訓覇】 あの人はずまり宗派なんでものは考えておらんいから。宗派より大きいですから問題は——

【丸山】 「同朋の会」を指導しておられる立場から、形の上だけの問題ではなく、精神的なといいますか、思想的なといいますか、学問的な問題を含めまして自己診断すると、このへんに重大な問題があるとお気づきになっている点はありませんでしょうか。

【訓覇】 まあ私どもには幸い清沢さんの伝統があるものですから、そうはありませんがね。

それが西本願寺みだいな立場ではちょっとできません。私どものところはその点ではもういいですな。

その点はどういいたいですか、いま、日にまあ三百から四百人来る門徒、奉仕団ですね——

これが本山へ参って話を聞くのは研修を受けるといふことが目的ではなしにですね、帰って自分のお寺でひとつつ職の尻をたたいて、お寺を中心にして信仰運動を推進していく中核隊としての教育をしてやるんだ、帰してやるんだと。本来はお寺でやるんだけれど、君らの住職がやる気力も自信もないもんだから、かわってここでやるんだから、帰って住職の尻をたたけと、そういう意味でやるんだと、ここへ来るのが目的じゃないんだと、帰ってからやるというところに重点をおいて今やってるんです。これがだんだん地方へ浸透していくと、今の日和見している住職たちがだ

んだん腰をたててくるんじゃないかと、そういうふうにも思ってるわけなんです。

【丸山】 清沢先生の理念というものが非常にクローズアップされていますが、それを継承していくということは、更に発展させていくことだと思えます。私どもの教団でもそうですが、宗学というものをやっていく方が非常に少なくなってきました。なるほど若い者は実践をしていけば良いんでしょうが、今の時代ですと、若い人は実践的であるということだけでなく同時に勉強していくことも必要だと思えます。そういう若い人を養成していくということについて具体的などういう案をもっておいででしょうか。

【訓覇】 これはですね、大学に数名の若い教授、助教専任講師のクラスのものでありますし、そういうことわかるのがだんだんに助手などにもありますので、なるべく早く教授陣に引きあげてですねやっというと思ったりします。そういう教授にはですね、優秀な学生が（ついていくんです）真宗学をやるものがさうとうふえてきておるんです。それでできるだけ早い機会にですね、宗派の方からのさうとうな補助をだしてですね、大学院で重点的にやっていきたいと思ってるんです。今までのように教授は少数

でいいですけれども、教授内容には、近代的な思想のうえに真宗教学、親鸞の思想を理解した人をつくっていきたいと思っっています。まあ約二十人くらいと思ってるんですが寮を早急につくりまして、教授の推薦で收容しまして一番つとり早い人材の養成ということを考えてるわけです。

一方は少数の学者と、一方は大学院を出たらすぐに教化活動に生涯を捧げる決意をもつ人間をそこでつくりあげていこうという考えです。大学を設立している趣旨はやはり親鸞教学の浸透ということですからその面だけ特に宗派から補助を出していいわけです。大学院生を中心にしても間にあいませんからね、夜はそこでヨーロッパの近代的教養とそれから真宗の背景になっている大乘仏教について、ひとつの学問的理解もですが、やはり修道的な仏者としての理解を持たせて、そして「同朋の会」という願いを若い人が背負って各地でもって推進して行って欲しいという——そういう寮をつくりたいと今思っているんです。

【丸山】 他の仏教大学が一般大学化していくなかで大変うらやましい話なんです——

【訓覇】 他の浄土宗とか、妙心寺の花園の先生方々からも話を聞くんですが、私のところにもあったんです。この

頃聞かなくなりましたが、なんで総合大学にせんかとさかにやってきましたが、絶対にならないと、まあそう僕らはこぼったんです。僕は絶対にならない。それは金があるんですがね大学だけに——これはまあむちゃな、予算の一割近いものを出していますが、それはかまわないと、金がいってもやむをえないとそう云ってがんばり通してきたんですけれども、まあ私の云うとつたのが通るんじゃないですか。

【望月】 いやその方が本当のような気がしますねえ。今われわれの大学とくらべますと……

【茂田井】 その点うらやましいですね。

【訓覇】 今竜大で困っていますわね。仏教学と真宗学とを別々しようかなんていうことを西（西本願寺）の当局が云うていますから……

【望月】 みんな同じような悩みになってきましたですね【訓覇】 私はまあ今二千人（ですが）多すぎると思うとるんです。せいぜい五・六百人——そう云うとるうちにふえちゃって——ええ二千人で多いですよ。半分にしないとあきませんねえ。少くとも千人。これはハバホードっていうのがありましてねえ、フライデイルビアの郊外に。これ

はやっぱりあのイギリスですね、オックスフォードなんかの精神を継承してやってくるクエーカーのあれですが、あれはやっぱり六百人くらいです。僕は見にいっただんですがね。

【望月】 全寮制で六百人くらいですね。

【訓覇】 全寮制です——

【望月】 ええそうですね。

【訓覇】 これはよくやっていますねえ。僕はやっぱりあれがいいんじゃないかと思えます。

【望月】 そうですねえ。

【訓覇】 量でなくて質で宗門大学はいくんでないとね。小さいだけでなしに、どんな人間を一体送りだすんだということができますか。

【望月】 そうですね。もう質で勝負をする時代になっています。

【訓覇】 これはどうしても堅持していかなきゃいかんと思っとるんです。

【茂田井】 あんまりねえ、量ばかりふやしちゃって、あのこのあいだも、日本仏教学会がございましたなあ東京に——あの時にも大谷から安藤先生なんかみえていて、あれは紅林先生ですなあ——駒沢の——ひさしを貸して母屋

をとられたようなかっこうになってるんだなんて云っとられましたよ。

【訓覇】 まあそうなりますねえ。

【茂田井】 つくづくかこつておられましたがねえ。

【訓覇】 あんたの方はそうじゃあないんでしょう。

【望月】 いやもう母屋をとられちゃったような感じ——

【訓覇】 学生はどんだけですか。

【茂田井】 一万です。

【訓覇】 ああ——そりゃああかんなあ。一万ですか——

【茂田井】 それで仏教学部が五百ですから——

【訓覇】 しかしそうなればですねえ、そのままいらっしやって、今私が話をしましたように、特に日蓮教学、仏教学やるんですね優秀な人材には特に宗務所から補助していくと。学資なんかも補助して、そこに集中的に育英の計画をお立てになったら、それはそれでいいんじゃないですか。

【望月】 そうなんですかねえ。

【訓覇】 同志社なんかはねえ、神学部なんてきわめて小さいですよ。そのかわり寮もみんなただでねえ、素晴らしい寮で、神学部だけはやっています。

【望月】 まあ今の学生数を半分のうちなんかはいたしま

して、それでその中でこんどはエリート教育をしなくてはならないんじゃないかと——

【訓覇】 どうしてもいいものを入れてエリート教育をしなればだめですねえ。

【望月】 エリート教育をしていいのをつくらないと勝負できないんじゃないかと思えますねえ——

【訓覇】 ああ、あきませんねえ。

【望月】 ええ。これはまあわれわれべえべえがそんなことだってたつてもだめなんですけども——

【茂田井】 いやいや——

【訓覇】 いやまあそうですね一万ですか。じゃあ竜大と同じくらいですね。

【丸山】 ちょうど同じくらいだと思います。

それから、学生の方がですね、優秀なのは仏教学の方へ行つて、宗学の方をやる者が少なくなるという現象はないんですか。

【訓覇】 私はだんだんそうなるんだと思っていましたかね、今真宗学に三人ぐらいいいのがおりましたね、若いので——ここらのはいいのが来ますね、来てますねやっぱり教養過程のとき一年二年の——私はもう教養過程が大事なんだと——私なんかの経験によると予科ではな

にしとるのか半分遊んどつたようなものだけれど、勉強するのはしましたし、——

【茂田井】 そうですね、予科でほしい方向がきまりますからね。

【訓覇】 あんまりたくさん単位をとらしてね、野放しにしておくからいけないんだと思います。ひとつねえ生活に密着したそういう入門の講座みたいなのに力をいれるようにした。そのためでしょうねひとつは。いいのが今来ていますわ。

【茂田井】 それはいいことをうかがったです。

【訓覇】 そんなところから、大学院の学生だけを二十人（寮へ）收容しようかと思いたつたんですよ。この場合も（優秀な学生が）来ていなかっただめですけどねえ……

【望月】 そうなんですけどねえ、エリート教育をしなけりゃならないといういいながら、エリートがいるかどうかということが問題になってきますね。

【訓覇】 それはやっぱりそのためには日蓮、それから釈尊、まあ仏教ですね、そういう思想が現代にいかん大事かっていう自信をもたせてやらなければねえ——

【丸山】 私どもの方にそういう態勢がないんで空論になつてしまふんですが。立正大学と大谷大学、あるいは竜大

や駒沢大学など、仏教大学の間の交換教授とか、あるいは協同研究をしていくとか、仏教外の学門などの場合には分担して専門家を養成していかなければできない面もあると思いますので……そういうふうな夢はおもちですか——

【訓覇】 それは私一昨年からね、竜大と花園、全部講座を解放したらどうやと、どこでも好きなところへ（聞きに）行けるようにというところですがね。押し切つてやればやれんことはないと思いますけど仲々やっぱり大学の教授っちゅうのは面倒なのがおりましたねえ。（笑）——とりあげようと思っておりますがね。私どももそういうことを（考えております）。

あなたのおっしゃることも一つの方法ですね。私らはは（おたがいに）講座を三つの学校が解放したらどうや、とね——

【望月】 講座開放ですね——

【訓覇】 例ええ場合によっては同志社（大学）ともかまわないから講座の解放をやろうと——これは云うてはおるんですがね。

「そういうことはやっていいと思いますねえ。また欲をいえばあなたの方とも——東京の方の大学とも——

【茂田井】 駒沢・大正などもありますからねえ——

【訓覇】 これは必要ですわ。そうでもしなければ今から宗派の中にだけ閉じこもってたつてしょうがないとちがいますか——

【望月】 そうですね。

【訓覇】 そんなわけで東・西（本願寺）も、十派もあつてもしかたないからひとつにせいといつとるんです。他は賛成しとるんだけでも西だけがだめだ（というんです）——四十八年の親鸞の誕生八百年の行事には、十派の共同宣言をだすことにしましたわ。

【茂田井】 ほほう、そうですね——

【訓覇】 そういう意味からことに大学も——将来宗門を背負つていく各校の人間の交流は必要ですわなあ。もうセクトでけちなこといっとたつてしゃばばは相手にせんのや——そういう計画がありました、私があいだにはいつて——京都だけでは、やらにゃあいかんと云うてはいるんですが——

【茂田井】 京都はいいですねえ、近いですからねえ——地の利がいいですからねえ——

【訓覇】 交換教授というか、もっとその範囲を拡げた意味の——

【望月】 講座解放の方がよろしいですね——



【訓覇】——交流ですね、あらゆるパートの交流というのは非常にいいと思いますね。お互いに刺激になりますしね。

【望月】そうですね。

【訓覇】それから大きくなってから——大きくなってからということもないでしょうが——それぞれの宗派を担任するようになれば非常にいいですわ。知りあっているっていうことになれば——

【丸山】——それからお西さんの方をみていると時々妙なことがとびだしてきますですね。その政治的な問題ですが——同じような規模の同じような体質の教団であってこちらの方は余りでてこない、あるいはそういう問題がでてくるのを押えているのかもしれないが——たとえばこの宗門を足場にして政治家になろうとか、票田にしようとか、様々な平和運動とか、そういう世俗的な政治の問題とからんだ問題をどういうように処理されているのかおうかがいたいと思うんですが。

【訓覇】少くとも西（本願寺）はねえ、そういう伝統は強いですね。社会的なあれ（問題）に対する（姿勢は——）今の靖国神社問題は、おそらく竜大の圧力じゃあないですか。ただししかしそういう傾向は多いです。私の方も西が参

議院なんかやるもんだからそれはだいたいぶ云ってきておりましたけどもね、しないと、それは檀家に専門の代議士があるんだからそれを応援すりゃいいんで、そりゃあ創価学会のようにねえ、十人も二十人も出すんらだけど一人出しか出さんかなんていう馬鹿なことほしなと云うて蹴ってやったんです。そういうんなら総長が出ると——いうんでおれはそんなものに出んというたりました——そんなことはせん方がいいですわ。

【望月】——しない方がいいと思いますよ。

【訓覇】西（本願寺派）はああゆうことがすきですからね。二人出して当選するはずがないんですから、一人ならどうか——ですけど——あれは永野君富士製鉄のおかげで当選したんでしてねえ、他の者だったら二人とも落選ですよ。まあみっともない話です。

【望月】——みっともないですねえ。

【訓覇】そのかわり檀家で出ると代議士——参議院の——これは応援するようにしてます。

【丸山】——これは幾人も応援されるんですか。

【訓覇】——ええ何人でも。参議院と（衆議院）両方あわせると百人くらいおるんですけど。政治的に用があったら、そういうの応援しといてそういうのを使った方が——たの

んだ方があんたずっと早いですわ——

【望月】 それは党とは関係なく応援するわけですか。

【訓覇】 ええ、もう関係ありませんですわ。

【望月】 それが本当だな——

【訓覇】 天理教がやめましたわねえ。天理教から参議員を出すことは——

【訓覇】 まあ早よう家へ帰って、昔のあの空気（註「真人社」の頃の意と思われる）をすった方がええですなあ。（笑）今でもそう思ってます。

【望月】 今、「同朋」運動がすすめられていく——そして古い信仰のお説教をする人たちがたくさんいるわけなんでねえ、そこへ「同朋」運動へ入っていくわけなんでございませうけど——

【訓覇】 だいが征服しましたなあ——

【望月】 はっきりそのお説教をする人達の違い——その人達の理念の違いというのは、はっきりでてるわけですか。

【訓覇】 このあいだ門徒の代表呼んで話とつたらやつぱりそうとうははっきりしとるようですなあ。私らわからんけれども。

ただ昔ながらの説教者のその退路を断るとまた嘸みつきますから、総外説というのがありましてね、そこで毎日の説教、全国からやらせておるですわ。

同朋会館では講師団へ若い連中——まあ将来性のあるのを皆んな呼んできてやつとります。

もうこの説教者でも、もうこつちえ来たなつ、というようになりましたわ。もう大体態勢はぎまったです。

【望月】 今年私友だちと能登を歩いたんですけれど、その時お年よりの真宗の方に会ったんです。電車の中で話をしたんですが、これからお説教に行くところだというんで同朋運動のですかと聞いたら、いや私は同朋運動じゃあないんだ、とこういうわけです。私が同朋運動は大変いいことだと思ってるんですけどっていったら、いや、せがれは同朋運動やるといふんです。私は年をとってるせいかどうかもそこまでいかないんで、昔ながらのをやりますと、まあこうその和尚さんがおっしゃってましたけども、その辺がどうも面白いなあって思ってみていたんです。（笑）

【訓覇】 能登は——あんたにお会いしたような説教者の多いところなんです。

【望月】 そうなんですか——

【訓覇】 そのなかでこつちへひっくりかえったのが、若

いいいのでね、でてきたもんだから、まあ大体態勢は決つたんですよ。まあこれほおっておいてもいけますねえ、これは——

【茂田井】 その古い方の説教といいますと、何かやはり作法があるんですか。

【訓覇】 作法というほどのことはありませんけどねえ——まあ、話ですね、生活を通さない、いわゆるお説教になつているんですね。

【望月】 開山さんありがたいということの話になつたり——

【訓覇】 ええ。だんだんそういうものを聞く人種は死んで、滅んでもう補充がつかまさんからねえ。(笑)

【茂田井】 私の方ではこの説教というのは一つの型がありましてねえ——

【訓覇】 ああそうですか——

【茂田井】 ——回向をやったりして——

【訓覇】 そんなことはありませんわ。

【望月】 それから態勢が決まったと総長さんがおっしゃつておられましたけど、もしわれわれの方で、このようなことを強方に推進していきますと、こちらのように中央集権がはっきりできるところはよろしいんですが、日蓮宗

というのは、その中央集権というのがそれほどはっきりできていないので、離脱していく寺院が多くなつていくと思つていますが——

【訓覇】 はあ、そうかもしれせんね——

中央集権がはっきりしとるっていいにしても、まあ多少はそうかもしれないけれども、田舎へ行けば、そう本山のいうことを聞かんでもいいんですからねえ。ただ私のところは十ヶ寺か二十ヶ寺単位で組、——くみです。——組の中に一人か二人づつは人間をみつつけてきておいてありますから——そこらへんはだんだん若い層をつかんでおるので、年がたつに従つて、その発言力がだんだんでいって漸時その権力ではなしに、地方の自主的なひとつの空気で動いていくように、その仕掛けはしてあるんです。うまくいくかどうかは——

【望月】 じゃあ離脱問題なんていうのはほとんどないんですね。

【訓覇】 ほとんどありませんねえ。

【丸山】 今云われました人のいるところを特伝地域に指定していかれたというわけですねえ。

【訓覇】 始めはそうしたんです。

【丸山】 最初はこういうものを基盤にしてそういう人の

選択というか発見をしていったのでしょか。

【訓覇】 これは大体はね、真人社をやっとって大体は、ある程度のことわかっておったんです。

—そのところへ同朋の会運動をはじめる十年前に、暁鳥さんが昭和二十五年に総長になりまして、十年間規模は小さいんですけども、特に「同朋壮年」—お寺の中心になる壮年を中心に壮年の奉仕団をやっとったんです。その中で大体この地区にはこういうのがおるといことがわかつとったわけです。今ではここへ来る（本山のこと）人間全部、ある程度分析して、地方の教務所へ人名簿を送ってますからね、教務所の教化委員会でそれをつかんで伸ばしていくようになります。地方でやるようにゆずりましたんです。

【望月】 基礎があるんですね。

【茂田井】 それからデータを地方の教務所へまわすというふうになってるわけですね。

【訓覇】 しかしあんた方も私のところも同じだと思んですが、地方の宗門に生まれた檀徒の方で、東京なり、大阪なりに流入してはるんじゃないですか。

【望月】 そうなんですな。

【訓覇】 私どもも一応いろいろやってきましたけれども

今度は若くして入ったもの（都市流入）、引越した者でもいいんですか、若い人で（都会へ）入った人は狭い部屋しかありませんから仏壇ちゅうわけにはいかないので、南無阿弥陀仏の御名号をやることにしたんです。小さいのを。どこにでも置けるように。それは地方の寺の住職から教務所へ云って、自分の檀家のこういう人間が東京のどこへ行つてると、だから本尊をくれと—そうするとその本尊を渡すと—と同時にですね送った人間の住所を東京へこつちから送ってやる。ここにいるからこれをつかんでひとつ同朋の聞法の会をつくればいいというように—

これはなかなかいいですよ。そういうことをおやりになったら。南無妙法蓮華経を、ひとつ狭い部屋にしかおれん者に無料で下附するから転入先の住所をおとりになつて—

【望月】 実はその御曼荼羅をつくったにはつくったんですがございます—

【訓覇】 これだと比較的つかみやすいですし、それからつかむつかまんよりもね、もううたということだけで非常に喜びますわ。

【望月】 それがひとつのきっかけになっていきますしねえ。

【訓覇】 その時は何んとも思わなくてもすねえ、壮年になるとそれがひとつの想いだすことになりましてねえ、寄附金に応募してくるケースがだいぶあります。

私のところも本尊を阿弥陀さんにするか、曼荼羅の南無阿弥陀仏の名号にするかですがね、私ら昭和三十七年に、地方の住職から東京へ行つとる門徒の住所をとりまして、東京の出張所へやって、個別訪問して集めたんですがね、——約四千ばかり——それはあんた調べてみるとそれがほとんど創価学会に折伏されとるんですよ。必ず一回はやられておる。これはもう待つとつたんだつちゅうわけでね、そのおかげでまとまりましたんで——

そんなことがあって、うちの本尊さんは南無妙法蓮華經じゃあないんだぞ、南無阿弥陀仏だぞといわないと学会にとられるというんで名号にしたんです。

【丸山】 話かとびますが、門主様を中心とした今のような教団はいつ頃からだと理解したらいいんでしょうか。

【訓覇】 最初からではありませんねえ。蓮如・覚如ですが、覚如が一応やったわけですけれども、そのために関東の門徒の反感を買いました、非常におとろえたわけですよ。そのあたりからできてきたわけです。蓮如はだから必ずしも中央集権的な大谷家を中心になってっていう、そういう

うんではなしに、門徒につかえるっていうそういう精神です。ねえ。

【丸山】 これは悩みでしょうね——

【訓覇】 これは本当いとうね私ところの宗教の象徴になつてゐるんすわ。天皇と同じように。だから象徴通りにやっつけていけばいいんですけど少し昔のが残つてゐる——これは日本人の体質もあるんじゃないですか。

【望月】 ええ日本人のものの考え方って申しますか、それがありませんね。

【訓覇】 これはどうなりますかなあ。まあ一体古い既成教団は一体どうなるんですか。

【望月】 いやこれは変りますねえ。

【訓覇】 私先月の——十月の二十一日に園田（厚生大臣）氏と堀（建設大臣）氏に会つたんですが、これは二人とも本願寺教団に近い人ですがね——やっぱり創価学会をみてね、宗教々団とはこうあるべきだと、つまりどうあるべきかについていうと、職をもつてゐる在家の人が、場合によっては職をすてても、自分のもつてゐる信仰を、一人でも多くの人に植えつけようと思つてゐるあの熱心さだと。信じようとは思わんけど、それからみたら本願寺さんなつたらんじゃあないかと云うんだね。わしの所は「同朋の会」運動

をやっとるといって法螺をふいてやったけども。そういう  
みかたもありましてね、まあどちらかというとお寺中心で  
すね、菩提寺的な考え方が強いでしょう。しかしそれで一  
応（大衆への）ルートはあるわけですから、その菩提寺的  
な場を、同時に信仰教化の場に転じていくということがあ  
りませんとすね、形だけの寺は残っても、宗教団体とし  
ても歴史から葬られていくんじゃないですか。そうい  
う点から、どうなるんだということですね。

もう護るっちゃうだけではあかんのではないですか。も  
う護れませんか。

【望月】 もう戦後の教育を受けた者が三十・四十になる  
と随分違ってきますからねえ。子供の教育から違ってきま  
すから。

【訓覇】 まだ戦中派の諸君になれば、家の躰と、お仏壇  
もあります、もうなくなってきましたね。核家族になっ  
て――

【望月】 核家族になって親のもってる躰が子供に行くわ  
けですから――文化の伝達が随分違ってきますから

【訓覇】 急激に変わりますねえ。

【茂田井】 寺の場合は多少古い躰が残りますがねえ――  
【訓覇】 もう私の方は寺の寺族もあきませんねえ。だか

ら今寺族を――寺の高校生、大学生――そこらを研修やっ  
とるんですが、いいですねえ。ですからこんなふう近代化  
していくと人間が商品化して時間の中にはめこまれてしま  
いますから、だから求めておるんですよ本当は。無意識的  
にであつても――それにやっぱり応えなければいかんので  
しょうね。そういう点からいえば、僕は宗教の時代だと思  
います。

【望月】 そうですね、疏外からの回復という意味では宗  
教の時代ですね――

【茂田井】 人間の回復ということですね。

【訓覇】 そうです。

【望月】 しかし今の既成教団が疏外の回復に應えられる  
かどうかということがありますね。

【訓覇】 それは応えられる教学の近代化っていうことに  
なりますな。

【望月】 そうですねえ。

【訓覇】 やっぱり仏教についての学者ではあきませんな  
――仏者にならんと――

そういう人間をつくるのが出来ればいいんじゃない  
ですかなあ。

【望月】 どうもその仏教についての学者というのはその

文献学的な学者になつてしまふんでね、どうも——仏教哲学としての学者にならないんで——

【訓覇】 学問がいくら盛んになつても、仏教そのものが盛んにならん——そこらへんに問題がありますね。

けれど民衆は本当に待っているんだと思いますね。こちらには自信をもつて、まあ本気でやるかどうかというところが先ですな。

【望月】 民衆は待っているんですが、既成教団としてもたらずものがすれちがっているんじゃないですか。

【訓覇】 すれ違いですなあ。

(註・「創価学会」のことや「葬式無用論」のことなど、様々な話題が語られたが、その部分は省略した)

【丸山】 茂田井先生がはじめておいでになりましたので同朋会館を拝見させていただきたいと思ひます。

【訓覇】 ああそうですかわかりました。ちょっと待って下さい。案内させます。

【丸山】 長時間お忙しいところを有難うございました。

(このあと、研修部長、柘植蘭英師の案内で、同朋会館の建物と、奉仕団の研修の現場を拝見させていただいた。)